

<巻頭言>

発刊にあたって

山田礼子
同志社大学

2008年3月に初年次教育学会が発足して8か月近くが過ぎたが、念願の初年次教育学会誌『初年次教育学会誌』第1巻第1号を刊行する運びとなったことは望外の喜びである。学会誌を発行するにあたっては、編集委員長、副編集委員長をはじめ編集委員会の皆さんには大変な編集作業に当たっていただき、心から感謝をする次第である。

日本における初年次教育が急速にかつ普遍的に広がってきている現在、学会に期待されることおよび学会としてそうした人々のニーズに応えていく責任を関係者一同は痛感している。

そうしたニーズは初年次教育の普及と並行するかのよう多様であるが、大学の種別や個性によって提供する初年次教育の内容や目標も異なってきたのが実際の現状といえる。初年次教育学会がそうした大学の種別や目標に合わせて初年次教育モデルやペダゴジーを研究あるいはノウハウの交換や担当者の交流を通して収斂していく場となっていかなければならない。

また、初年次教育が学問として制度化していく上では「学会の設立」が必然となる。「初年次教育学」を体系化するという目的のために、「初年次教育学会」が設立されたのも学問としての初年次教育学の制度化に向けての第一歩であり、次に知識レベルの制度化過程には、学会大会とジャーナルを通じての研究成果発表が重要な役割を果たすと考えられる。こうした意味でも、『初年次教育学会誌』は初年次教育学を制度化していく上でも重要な礎となる。

このような記念すべきかつ今後の初年次教育の方向性を定めていく基礎となる第1号には、今回の学会の発足に際して、あるいはそれまでの初年次教育の普及に際して道筋を示してくれた理事の方々に寄稿をしていただいた。お忙しいスケジュールにも関わらず寄稿して下さった皆様に心からの御礼を申し上げたい。

寄稿いただいた論文は、書き下ろし原稿に加えて、2008年3月の初年次教育学会の設立大会での基調講演者であるアレクサンダー・アスティン氏の講演、ラウンドテーブルなども掲載されている。学会を通じての学問分野の制度化という視点から見た場合、こうした学会での実際の発表を原稿として残すことは、ある時代の初年次教育学の研究や実践がどのような方向に向かっていたのか、かつトピック（テーマ）を支えている学問領域や方法の動向をうかがい知る資料として貴重である。

今後は、自由投稿論文なども充実させていくことを計画している。多くの研究論文や実践報告が学会誌に投稿されることを通じて、初年次教育学が学問としてもかつ実践としても日本において基盤を築いていくことを願っている。

(初年次教育学会会長)